

30周年記念
特別講演

異文化は発想の宝庫

ヤマザキマリ×野谷文昭

十四歳でのヨーロッパひとり旅

野谷 ス페인語圏の文学を専門にしている野谷文昭です。ヤマザキマリさんとは、四年前に雑誌『ユリイカ』のガルシア・マルケス追悼特集で対談をやったんですね。それが元で今日の対談が実現しました。その時知ってびっくりしたのが、十七歳でイタリアに留学する前の十四歳のときにひとりドイツやフランスに行かれています。それはどういうきっかけだったんですか？

ヤマザキ 漫画家のヤマ



ザキマリです。本日は宜しく願います。私の母親は音楽家なんですけども、私が十四歳の冬休みに、自分が行くはずだった旅に急に行けなくなったので、私に行って来てくれないかということで、フランスとドイツにいる現地の音楽家のところに一カ月間代わりに行かなきゃならなくなりました。ただ後々の彼女の告白によると、あれは自分が行けなくなったからという旅じゃなくて、企てたものだったんです。当時、私は十四歳で普通に中学校に通っていました。日本の中学二年生といえれば進路はある程度は決めて、担任の先生が指導していくわけですが、私は子供のときから、絵が好きだというよりも、白いところがあると絵を描いちゃうんです。よく街角で嫌な落書きがあるじゃないですか、あれも気持ちは分かるんですよ。折込み広告の裏が白いと、やったー！という気持ちになる。とにかく、私はたぶん絵でしか商売していけないみたいな気持ちですが、わりと若いときからあったんです。それを教師に言ったら、「絵は趣味だろう、絵では食っていけないだろう」と頭ごなしに言われて、落ち込んでいたんですね。そこで、母がそのときにちょっと考えたんですよ、人間たちが過去の時代に築き上げたものがあるから、ルーヴル美術館とか大英博物館に行けば、この子はたぶん自分が本当にやりたいことが見えるんじゃないかと思ったそうです。絵描きというものが職業として成立していた時代があり、しかも、今なお、絵で生きていくということが、不安定だからやめなさい、ではなく、不安定だからこそ誰かがやらなきゃいけないという意識が、日本にはないんですけど、海外にはあるんです。それが、母にとっては、学校に通うより教育になるなというふうな判断したみたいです。

野谷 そこで重要な出会いがあったんですね？

ヤマザキ はい、ドイツで厄介になっていた家を出発して、最

終目的地がルーヴル美術館だったので、パリへ行くためにリュッセルのホームで列車を待っていたら、私がどこに行っても視界に入ってくるじいさんがいるんです。私はつけられているに違いないと思って、自分が乗る電車が来たときに、急いでコンパートメントに駆け込んで、カーテンを閉めて誰もいないふりをしたんです。そこにじいさんやってきて、ガラツと開けて、「おまえは家出か」と変な英語で私に聞いただしてきてので、中二の英語力で、「私は家出ではない。私は旅行をしている」ということを告げただんですけど、おじいさんが私の前に座って、「おまえの親はどうかしている。こんな十歳の子どもを一人で旅に出させて」、「十歳じゃありません、十四歳です」と「同じだ」とか怒られて（笑）。それで「何しに來ているんだ」と言われたので、「私は西洋の美術にたくさんの興味を持っているので、本格的な美術館を見たくてこの旅をしているんだ」ということを告げただんです。そう言うと、大概みんな「偉いね」って言うんですよ。だから今回もその作戦でいったら、そのおじいさんは怒ったんですよ。「なんだと、それでおまえどこに行ってきたんだ」というから、「ドイツとフランスに行きました」、「おまえイタリアが入っていないだろう、バカか」と言われて、怒られたんですよ。「イタリアを端折ってヨーロッパ美術を語るな」。いきなりどこの誰かも知らない東洋人の娘に向かって、激怒りですよ（笑）。それで、「イタリアを端折られたこのセンスのない旅を計画したおまえの母親も母親だ」と、「すべての道はローマに通ず」と書いておけ」と言われて、すべての道はローマに通ず、と英語で書いてね。「よく覚えておけ」と言われて、こんなにずっと覚えておく言葉になるとは思いませんでしたけど（笑）。

野谷 日本では考えられない会話ですね。

ヤマザキ そのあとに、そのおじいさんは「おまえがきちんと日本に帰ったかどうか心配だから、おまえの母親に手紙をよこしてもらえ、これがわしの住所だ」と言ってる。それでうちの母は、私が無事に帰ってきたあとに、そのおじいさんに手紙を出して、「娘が大変お世話になりました、家出人と思われたようですが、実はあれは私が行かせた旅でございます」と、そうしたら、母とマルコじいさんが遠隔ペンフレンドになって（笑）、勝手に私の進路をどんどん決めていって。

それで十七歳のときの留学も、私の意志は一抹も入っていないですよ。私は日本の美大かなにかに入って思っていたんですけど、勝手にマルコじいさんと母の間で、「若いからこそ今のうちだ」と盛り上がりつつ、「学校を辞めさせてもいいから、すぐにイタリアへよこせ」ということになって、うちの母に「あなた学校辞めるしかないわよ」と言われて、「え？ 辞めたくないんだけど」と思ったんですけど、「もう今しかない、行ってみて、駄目ならまた戻ればいいわよ」と、状況に流されて、ノーと言えない雰囲気になっちゃって。

野谷 ほとんど不条理劇の世界ですね。それこそ魔術的リアリズムと呼べそうな気がします。ヤマザキさんは人間を移動型と定住型に分けていますけど、ご自身はもちろん、移動型ですよ？

ヤマザキ 完全に移動型ですね。やはりうちの母親が、例えば神奈川県生まれなのに、自分が楽器でやっていきたいっていうことを家族にもものすごく反対されて、「女で、芸能で生きていくなんておまえけしからん」と、さんざん言われたあげくに、北海道というまったく縁もゆかりもない土地で、オーケストラが創設されたとき女として第一号で入ったんです。親がそういう人間だったので、わりと定住をしない意識みたいなのはあり

ましたね。

野谷 その頃って中学生でしたか？

ヤマザキ 小学生ですね。

野谷 小学生です。旅への憧れみたいなのはあったんですか？

ヤマザキ 旅への憧れはあって、まず本から始まりましたね。母が本読みだったので、私が幼いときまず、絵描きになりたいと言いだめたときにくれた本が、『フランダーズの犬』で、非業の死を遂げる少年の話です。「それを読め、それでもおまえは絵描きになりたいか？」というような本だったんですけど、私は読んだあとに、このネロ少年、なんて要領悪い、ここにいなきゃいいじゃないと思ったんですね（笑）。

野谷 泣くのではなく？

ヤマザキ だっていろんな罪を着せられて、ひどい目にあっても村に居続けるじゃないですか。あんな村はさっさと去ればいいんですよ。それなのに居続けて、雪が降る中、暖房もない所で凍え死んでしまう。だったら、船にでもなんでも密航して乗って、暖かいところへ行けばいいじゃないですか（笑）。

野谷 面白すぎる。

ヤマザキ そういう発想が芽生えたのは、その本と一緒にもらった『シンドバットの冒険』と『ニルスのふしぎな旅』。全部旅モノですよ。絨毯か雁に乗って空を飛んじゃう。俯瞰でものを見る。そういう本と一緒に読んでから、『フランダーズの犬』の環境が許せないわけね。その辺から私の旅に対する発想みたいながありました。

野谷 僕も読みましたがそんな過激な反応はしませんでした（笑）。

ヤマザキ あとは母親がクラシック音楽をやっていたことも

あって、外国に早いうちからイメージを抱くようになったこと

と、父が早く亡くなったので、

子どものとき母が、カトリックの聖フランシス

コ会という、ドイツのおじいさん修道士が集まる場所によく私たちを預けて仕事に行っていた。すると、その中ではドイツ語しかしゃべっていないし、ドイツの美味しくないお菓子を食べているし、日本にいながらにして、異文化を強制されていたんです。

それと当時テレビをつければ『兼高かおる世界の旅』という番組があったんです。兼高かおるさんという素晴らしい女性が世界中を旅して、しかも出会う人がすごい。ケネディ大統領、サルバドール・ダリですよ（笑）。また兼高かおるさんは旅をしているのに着物やすてきなドレスを着て、旅の疲れをみじんも感じさせないすてきな笑顔で、世界中の殿方を魅了しているわけです。こういう人になりたいなって、そのとき思っていました。

野谷 あれは最高の番組でした。

ヤマザキ それから『JET STREAM』という素晴らしいラジオ番組があったんです。

野谷 そうそう。

ヤマザキ 夜中の十二時から始まるんですね。私は小学生でしたけど、それを聴いてからじゃないと眠れない。城達也さんと



いうハンサムボイスの人がいて、「ミスターロンリー」という曲が流れて、飛行機のエンジン音と上昇していく音が聞こえる。そこに城達也が「JET STREAM, JET STREAM, JET STREAM」と

いうふうにも三回繰り返す（笑）。そこで歌が始まって、ナレーションが入るんですよ。掛かる音楽は、大体、世界が舞台になっっているイージーリスニングや映画音楽なんですよ。例えば、イタリアだったりすると『ローマの休日』とか、フェデリコ・フェリーニの『道』とか、そういうのが掛かる中で、突然コマリーナルになるんです。ナレーションの城達也のそのまま、「ローマは今年午後三時。雨上がりの石畳の上を松の木陰で雨宿りをしていた人たちがせわし気に外へ出る。コロシアムの遺跡に当たる斜陽の光のなんと美しきことよ」みたいな感じで。聞きながら雨上がりの石畳の古代ローマの遺跡とか妄想するわけですよ。さすがにあそこで焚き付けられる想像力というのが、ものすごく大きかった。

野谷 やっぱ普通の子供じゃない（笑）。

ヤマザキ もうひとつ一九七〇年代の頃は、漫画がすごかったですね。

野谷 少女漫画の第一世代によるストーリー性の強い作品が次々に現れました。

ヤマザキ 海外が舞台になっっている少女漫画が多かったんです。『ベルサイユのばら』だったり、萩尾望都さんのフランスとかイギリスの少年だけの学校の漫画、『ポーの一族』、『トーマの心臓』とか。あんなのを見たら「外国行ったら、男の子はみんなあなんだ」と、思っちゃいます（笑）。あれにも焚き付けられました。とにかく六〇年代、七〇年代の日本というのは、「おまえたちの知らない外国はすごいぞ」というのが発信されてましたね。

日本の漫画とルネサンス絵画

ヤマザキ 萩尾望都先生の作品は、漫画とは言っているけど、ほとんど文学ですよ。本人もものすごい本読みだということもあって、本をすごく読んだ人間が漫画というかたちに変化する時には、やっぱりああいうものになるんだなというのが分かる。漫画から漫画脳を育てられて描いた人間と、そうじゃない人間は、やっぱり違いがあると思うんです。

野谷 スペインのビクトル・エリセ監督が来日したときに初めてお会いしたんですけど、和服姿で漫画家というより作家のオーラが感じられたのを覚えています。萩尾さんがイタリアに行ったときの講演録、あれ素晴らしいですね。

ヤマザキ あれは皆さん読むといいですよ。ああいう方は、どこにいつの時代に行ったって、絵師としてやっていけるなと思います。ついでに言うと、ルネサンス時代の絵画と今の日本の漫画業界はほぼシンクロしているんです。ルネサンス絵画というと、日本人にとっては敷居が高くてよく分からない、そういうくくりがあるじゃないですか。ところがルネサンスの美術を解体していくと、今の日本の漫画業界とはほぼ変わらないんです。古今東西、絵というものが、これだけの経済力を持って動いていた時代は、たぶんルネサンス時代と今の日本です。それぐらい当時のイタリアにおける絵師たちというのはハードに働いていた。しかも契約を交わさされていた。しかもその契約だって、きちんと公証人を立てて、「いついつまでにどれだけの絵を仕上げろ」、しかも絵の詳細まで、「誰々とちよっと似たような感じで、だけでもっとスタイリッシュな感じで」とか、いろんなことが書かれている。

私もフィレンツェに留学しているときに、美術史を専攻して
いましたから、国立図書館に行つて、普通の人が見られないよ
うなものを見せてもらえる。するとその簡条書きが面白いんで
すよ、皮算用しているんです。まだ入つてこないお金でどの借
金を返すとか、この人はちゃんと返せたのかしらと思つぐらい
の。もつとリスキーなのが、今だったら別に締め切りいくら遅
れてもいいわ、みたいなのがあるじゃないですか。でも当時は、
締め切り一日につき、ペナルティが掛かります。締め切り一日
遅れると、いくらというお金を払わなきゃいけない。だから今
みたいに、「締め切り遅滞することこそ漫画家だ」みたいなこ
とを言つていられない。もう、そのときまでに上げなきゃいけ
ない。そういつたことのやりとりが、きちんとアーカイヴされ
ているんです。ところが、今の漫画協会はまったくそれができ
ていないですよ。できていないということに、私が一時期腹を
立てて、いろんなところでしゃべったらSNSで炎上しました
ね。「なんだこいつ、ものを言う漫画家だ」とか言われたんだ
けど、もともと私、漫画家になりたくてなつたんじゃなくて、
学生時代はボランティアでキューバとか行つていたような人間
だし。

フィレンツェからキューバへ

野谷 ヤマザキさんはもともと油絵をやっていたんでしょう？
ヤマザキ はい、油絵をやっていましたけど、当時すごく貧乏
で、貧乏でありながら、こき使われる立場でしたから、そんな
ときに、例えばキューバに行くと、社会主義国ですから、絵描
きさんとか、デザイナーとかが、例えば歯医者さんと同じよう

に給金をもらえて、家があつて、配給、当時、経済封鎖があつ
たので、そんなにたくさんさんのものを食べられていなかったで
すけど、一応ちゃんと絵で生きていくことが保障されている国を
見てしまったので、むかついちゃつて、イタリアのアカデミー
の仲間たちと「こんなんじゃないけな」みたいな運動を起し
たりしちゃつたんですよ。そんなのが漫画家になつたから大変
ですよ。

野谷 その頃は同志的な人はいたんですか？

ヤマザキ 私はフィレンツェのアカデミーに入りましたけど、
フィレンツェ大学の教養学科の美術史をやっている仲間たちは
みな同じ思いでしたね。当時は、作家の須賀敦子さんの描いた
コルシア書店のような、左翼系の思想を持った詩人であつた
り、神学者であつても左翼意識を持っていた人たちが集まつて
きたサロンに、私も実はいたんです。そういうところで南米か
ら亡命してきた作家とかと話をしていると、私はまだ十七か十
八で、「日本から来て絵を描きたい」と言うと、まず鼻で笑わ
れたんですよ。「おまえ、そんな何も解かっていないで、何の
絵を描くの。ファンタジーでギョツと絞られたお前の絵なん
て誰も感動しないし、誰も欲しいと思わないよ」と頭ごなしに
言われてショックだったんです。「まず、大体おまえ日本から
来たと言つても、日本の文学も何も知らないだろう」と言われ
て、最初に本棚から取つて、渡されたのが、安部公房の『砂の
女』イタリア語版、その翻訳者が須賀敦子さんだったんです。
もうポロポロでしたけど。「おまえ、まずこれ読め」と言われ
て、私、最初に安部公房をイタリア語で読んだんです。それを
読んで、滅茶苦茶はまつて。安部公房の戦後のすごく厳しかつ
た時代の文学にもすごくはまつちやつたというのは、私も貧
乏だったので、思想がシンクロするんですよ。ちなみに当時の



日本はバブルでした。皆さんがお立ち台で踊っている時代でした。私はもう食べるものもなく、水を飲んでベルトを締めるとなんとなくお腹がいっぱいになるみたいなのがする、そういう生活をしていました。家のインフラは全部消えていました。ガス、水道、電気、何ひとつとして使えるものがないので、自分で「屋内ホームレス」と呼んでいましたけど。

当時のイタリアの大学では、例えば、ソビエトがいいのかそれとも毛沢東がいいのか、なんてことをしきりに議論していました。その中の小さい組織で、キューバ革命派がいたわけです。話題に上がるのはフィデル・カストロであり、チェ・ゲバラであり、そういう人たちは大体ガルシア・マルケスを読んでいます。私はそういう集まりにはまってしまったわけです。そこで、ボランティアを募って、ソビエトが崩壊したあとに、「経済制

裁されて、まったく食べるものも何もないキューバにみんなで力を貸しに行こうじゃないか」と、私はキューバに行くことになったんです。名目上は「サトウキビ狩り」なんです。

私たちがサトウキビを狩りに行ったのはどうしてかというところ、ソビエトから、輸入していた機械が全部使えなくなっただけで、ガソリンも何もないから機械が頼れない。

手動でサトウキビを狩る力が欲しいということで外国から募って、私たちみたいな若気の至りの学生たちが、自分たちで飛行機代を払ってキューバに行くことになったんです。

野谷 そのボランティアを現地ではブリガダ・デ・サフラつまり「砂糖キビ狩り部隊」と呼んでいて、僕が初めてキューバに行った一九七一年には日本人のグループもいました。キューバは砂糖をソ連に売って、ソ連から石油を買うというバーター貿易をやっていました。

ヤマザキ そうです。それが成立しなくなって、もう完全に孤立状態で観光収入ぐらいしかないわけですね。でも観光といったってアメリカ人は来られないし、ヨーロッパの国がカナダかメキシコみたいな国からだけですから、とにかく貧乏でした。配給で一日一人パン一個とかなので、何も食べるものがないんですよ。

野谷 それは何年くらいですか？

ヤマザキ 九二年から九四年の間くらい。

野谷 それ僕が二度目に行った年で一番ひどかったときなんです。ソ連が崩壊して、七一年のキューバはモノはないんだけれど、みんな元気でした。まだ未来があるみたいな感じでした。ヤマザキ やっぱ食べ物がないとなると人は衰退しちゃうんですね。当時、計画停電というのがあって、大体午後のみんなが電気をつける時間になったらつかないんですよ、暗くなつてくると。その家の中に十五人ぐらいが暮らしているんだけど、またその十五人というのが全部家族だと言っただけで、どう見ても家族じゃないでしょうっていう人種も混ざっている。それはどうも、昔のお兄さんの連れ子の連れ子の連れ子だった人みたいな、そういう人たちも一緒に、みんな一体化した家族なんです。

野谷 離婚率は高いけれど家族の絆は強いですね。

ヤマザキ そこでみんなで廊下に寝たりして過ごすんですけど、電気が消えますよ、見えないですよ、互いの顔が。そうすると誰ともなく、「ねえ、外行かない、外のほうが月明かりで見えるよ、人の顔」みたいな感じで、みんなで外の広場に行く、すると誰ともなく、家の中にある楽器を持って行くんですよ、弦が切れたギターとか。そこでなんとなくギターをポロンと弾いて、なんとなくパーカッションを叩き始めると、音楽ができて、なんとなく踊り始めるおじいさん、おばあさんが出てきて、それを聞きつけて近隣の家の中からも人が出てきて、気がついたら、なんか楽しいことになっているんですよ。これお金一銭も使わないし、食べるものもない世界の人たちなのに、何この楽しい生き方みたいな。そのときに私はドルを持っていましたから、ドルで買える外交官用のスーパーマーケットに行つて、チョコレートを買って、日本だったら百円ぐらいのチョコが、五百円ぐらいで売っているのそのチョコを買ってきました。そしてそれを十五人家族の中の五人ぐらいいる子どもたちにあげると、ワアッと一秒で食べちゃう。あつという間に。その食べ終わつたあとの包み紙、匂い付いているじゃないですか、あれをずっとポケットにしまっておく。遊んでいる間もおなかがいいたら出して、スーツでやって、「ほら、マリも嗅いでくらん」みたいな感じでやるんですよ。もう切ないですよ。

野谷 その種の光景には何度となく出遭いました。

ヤマザキ 何よりも私が一番号泣したのは、一連の滞在が終わって帰るときに、その家族の人が、「うち本当に何も無いんだけど、これうちの思い出として持って行ってね」って、新聞紙で包んだのを私に押しつけて、「今見なくていいからね、恥ずかしいから後で飛行機の中で見てね」と言われて、それ飛行

機に乗ってから、それがオランダの飛行機だったんですけど、栄養が行き届きすぎているような人ばかり乗っているんですよ。キューバ人が痩せ細っている中で、ヨーロッパの牛乳いっぱい飲んでる人たちの、体の大きさをやですよ。

野谷 そうそう。マイアミで出遭つた亡命キューバ人は肥満を帯びて居る人が多かった。

ヤマザキ でもそこで私、ガサガサッと新聞紙を開いたら、その家の中に唯一あつたゾウの形をした灰皿があつたんですよ、それはお父さんとお母さんが結婚をしたときに、お父さんがお母さんにあげたものって、唯一自慢のネタになっていたものなの。それが出てきたんですよ。私自分が泣き死にするかと思いましたが、あれを見たときに。ずっと飛行機の中で、隣にどっかいオランダ人がいましたけど、関係なく号泣し続けて、あの国のために私は何かもつとできることはなからうかと、時代が時代だったら、チェ・ゲバラの部隊に入つて何かしていたんじゃないか、くらいの気持ちになりました。

野谷 僕もキューバに骨を埋めようなんて思つたくらいですから。

ヤマザキ そんな状況でも唯一あの国の強さって、音楽なんです。音楽という支えがものすごく強い。さつきも言つたように、灯りのない家から外に出て、月明かりの下で何をやるかって、まず音楽、そして踊る。やつぱり唯一生きてる感性を豊かにできる、ご飯の代わりになる栄養素は何かと言つたら、そういう文化なんですよね。

野谷 そうですね、ルンバもマンボもチャチャヤもみんなキューバが発祥の地ですからね。元にあるのはソンという音楽ですが。

ヤマザキ そうですね。私は確かに大学に入ってから、そう

いった運動に入ったこともきつかけですけど、もともと私はラテンアメリカが好きでしたね、どうしてでしょう。土台からしてみれば、兼高かおるさんだったり、いろんなことがあるんですけど。

野谷 これだけしゃべるから、完全にラテンですね。

ヤマザキ ラテンですね。すいませんね、短い時間にどれだけ言葉を入れられるかというのが、ラテン式ですから。

野谷 そうです。相手にしゃべらせないと(笑)。

ヤマザキ すいません。でも、こうやっていかないと大学も卒業できないし、いろいろ大変なんです。思い出すに、小学校三年のときの学芸会の演奏会で演目が「南京豆売り」になって、それで私はなぜかマラカス係に選ばれたんですよ。そのマラカスを奏でているときに、目の前にキューバの海が広がり、南京豆を売っている少年の姿が見えて、それを絵に描きました。そのときの私は南京豆売りの絵しか描いていない。友達が「マリちゃん、これ誰?」「南京豆売り、私はいずれキューバに行つて、こういう南京豆売りと恋愛をするのよ」みたいな、訳の分からない妄想に走っていましたね。

野谷 ただ少年の南京豆売りなんていませんね。

ヤマザキ そうですね、南京豆売りって、キューバにいましたけど、大体おじいさん、おばあさんが豆を売っている感じですね。私の誇大妄想すぎたって、あとで反省しました。

野谷 この話、『世界の果てでも漫画描き』に描かれていますが、こうして語られるとやっぱり面白いですね。

ヤマザキ ただ思い描いていると楽しいんですよ。幻滅したときも、「自分のせいだな」とは思いましたけど、それはそれで、それを凌駕するもつと楽しい思い出がたくさんあるからいいんです。

『プリニウス』と教養

野谷 ヤマザキさんの漫画の中には名言がたくさん出てきて、僕が好きなのは『プリニウス』の第一巻だったかな、従者のフェリクスに対してプリニウスが言うんです。「教養を避けるものは人間のクズだぞ」、これ気に入っているんですけど。

ヤマザキ それ私がつくった言葉ですね。

野谷 そうでしたか(笑)。この大学には「教養」という言葉を被せた学部や学科があるものですから、つい気になって。でもパンフレットのコピーに使いたいな。

ヤマザキ さっきも紹介した、イタリアで最初に仲良くしていた、須賀敦子さんの本に出てくるロシア書店みたいなところの主催者であるイタリア人のおじいさんが、実は当時もう七十歳だったんですけど、イタリアのゲイ文学の創始者で、ひどい目にあってきた方なんです。あとで知ったんですけど、でも、その方がいるおかげでイタリアにおけるゲイであったり、ホモセクシュアリティというものの方が取れて、その中で育まれていく文学というのが、そこを軸に行ったらいいんです。そのおじいさんはすごく厳しいことを言う人。やっぱりイタリア人の当時の七十一八十歳というと、本当に皆さん強烈でしたから。

野谷 それはパルチザンとか戦争体験があることと関係がありますか？

ヤマザキ 皆パルチザンやっていますから。でも不思議なのは、昔の映像を見ると、ファシズムで、ムッソリーニがいる中で、みんな右手をあげている、ところが今生きている人に聞いたら全員パルチザンだったと。そんなはずないと思うんですけど。

ど(笑)。でもあのときは、パルチザンっていうのは非常に大変な目にあっていて、今私は北イタリアに住んでいます。さっきのマルコジいさんの元妻だったおばあさんは、当時のパルチザンのことを覚えていて、山岳地帯で殺された人とか、拷問にあった人の生々しい記憶が残っていますね。そういう過酷な状況の中を生き延びて、歴史を知らずして、教養なくして、人間が何かを表現するなんてのはあり得ない。表面的なものだけなぞって、なんかきれいなものだけ出そう、人気があるものだけ出そうって、そんなのは絶対に無理だよ。ということをおおじいさんにまず言われて、「おまえはまず一回大失敗しないとわからないな」みたいな。「壁にぶち当たって、生きたい、死にたいの問題までいかないぐらいにならないと、人の心を動かす作品なんかできないし、ものをつくる表現者としての資格はない」くらいのことまで言われて。古代ローマ時代の教養人というのはそういう意識をあたりまえに持っていた人たちですから、教養が持てた人というのは、お金がある人たちに限られていたのでごくわずかですけれども、大事なことだと私は思い、プリニウスを通じて漫画にしました。

野谷 それに関連して、僕がやっぱり気に入ったのは、ヤマザキさんが本村凌二さんという歴史学者と座談みたいのをやっていて、その中で本村さんが言っていた気がしますが、「裾野をどんどん広げなければ頂点は高くならない」という言葉です。

ヤマザキ ならないですね。「富士山を見てごらん」という話ですよ。まさにそうだと思います。裾野を広げずして、いきなり頂点に立とうと思う人間という発想自体が間違っているし、すごく不自然だし、成り立たないと私も考えます。でも日本に來ると、裾野を広げる素材を持つ人間って、やっぱりどこか変

わっていたりとか、人がやらないことをやったりとか。変人目されることが多いような気がします。

奇人変人論

ヤマザキ 実際私は奇人変人ばかり漫画に描いていますから、「奇人変人マニアなのか」と言われますが、マニアというよりも、必然的にそういう人だからこそ描かなきゃいけないし。そういう人の方が描いていて楽しいんですよ。やっぱり、毒気の強い人間を表現するほうが面白い。変人とか、悪者を描いていると、描く手が進みます。逆に正義の味方とか全然駄目なんです。ピューリタニズムとか、正義の味方でステレオタイプなみんながいいと思うような人間を描くというのは、やっぱりつまらないですよ。でも変な人間をドンドン描いているんだということは、文学、特にラテンアメリカ文学から学んだことです。変な人がそろっていますから。

野谷 だってはっきり言って、作家がみんな奇人変人ですから(笑)。

ヤマザキ みんな変人、遠くから見ている分にはいいけど、親戚、夫にはまったく持ちたくないっていう人たちですね。でも、そういうたちじゃないと、やっぱり何かを生み出せないのはしょうがないですね。だから、今描いているプリニウスも一生結婚しませんけど、噴火が起きたら見に行くおじさん、災害が起きると見て確かめたいという。あの気持ち確かに分かりますし、私たちもそうなるかもしれない、だけど、それを包み隠さずまっとうしてやったという意味でも、プリニウスは非常に魅力的ではあるんだけどやっぱり変人ですよ。そういう

人たちは何が特徴かというところ、周りと比較しない、比べない。周りはあだから、私はこうという、まわりの目線で、自分の形をカービングしていない人たちがほとんどじゃないですか。ラテンアメリカ文学なんて、たぶんそういう環境じゃなきゃ生まれ来ないですよ。

野谷 ラテンアメリカだと、特に男性の場合エリートはみんな法学部に行くわけです。法学部から弁護士になったり、政治家になったり、それがエリートの道です。けれど法学部に行つてドロップアウトするのが作家になる。

ヤマザキ 作家か革命家かどっちかになっていますよね。
野谷 そうですね。



ヤマザキ でもラテンアメリカつて、客観的に教養を生かしやすい環境ということなんでしょうかね。

野谷 単に本で読むだけの教養じゃなくて、教養を実践する場があると思うんですね。

ヤマザキ それはありますよね、やっぱり体をはって、本当に自分の身をもって、脳みそをガッツリ使つて体験をしたことじゃないと、到達できないも

のつてあるじゃないですか。

野谷 そうですね。

ヤマザキ 絶対。そんなにそれをうまくやりこなして、うまい具合に富士山のとつぺんに登りましたなんて人は、たぶん長続きしないですよ、絶対に。

野谷 日本の場合、仲良しになってしまつて、イエスマンばかりがまわりに集まつたり、批評し合わないんですね。ところが、ラテンアメリカの学会なんか行くと、バンバンたたき合うから。

ヤマザキ もう、容赦ないですよ。でも、あれを本人たちに言うところ、責めているんじゃないかと、コミュニケーションだつて言うんですよ。例えば、私と夫が夫婦げんかして、私が「もういいよ、喧嘩はたくさんだよ」と言う。そうしたら夫は「喧嘩なんか一度もしたことがないよ、コミュニケーションじゃないか」と言いますから。コミュニケーションにも程があるだろうと思いますけど（笑）。でも彼らにとつては、やっぱりディスカッションをして、思つていることは全部表現する、言語化することで、初めてそれが何かということがきちんと脳に届く。実感として伝わる。それを端折っちゃったら駄目なんです。人というのは熟成していかないんですよ。だから、ヨーロッパと日本の行き来をしていると、日本はそういった意味では居心地いいですよ、声を荒げなくていいから。いちいち電話掛けて、「すいません、ちょっと隣うるさいですけど」とか言わなくていい。なんとなく、あうんで悟つて、察してみんな気を遣つてくれる。でも、時々だんだんもの足りなくなつてきて、一人で怒り出すことがありますよ。私なんかおかしいと思つたら、最近怒つていないわ、みたいな（笑）。

野谷 なるほど。でもやっぱりその道具は言葉なんですね。言

葉対言葉で戦うしかないんだけど、日本はやたら、あうんの呼吸とかで言葉を端折ってしまう。

ヤマザキ 確かにいいこともあるんですよ。例えば恋愛概念とか、ラテンだとすぐに「アモーレ」って百回も二百回も言うから、だんだん有難みがなくなってくる。でも日本みたいに、なかなか言えなくて、一生涯言うか、言わないかぐらいのほうがインパクトはあるというのがあります。だからそういうところで使われるのはいいんだけど、大事な話合いのときにも、あうんの呼吸で分かるだろうみたいなのをしているじゃないですか。政府の中核でとか。私なんか一人でテレビに向かって言っていますからね。テレビに向かって語りかける時点でも、日本だとヤバい人になっちゃうけど、ヨーロッパではよくあることです。ヨーロッパなんか行ったら、場を読んでいる人で構成されているじゃないですか。しゃべっていれば、かぶってくるし。そんな人ばかりですから。特に今は、移民がどんどん入って来て、一律にこれが普通というものが存在しないんです。だから、子育てにしても教育にしても、人のあり方にして、家の中を見てみれば宗教は違う、人種は違う、育てられ方、食べているもの、何もかも全部違う、場なんか読んでいる場合じゃないんですよ。なのに、急に日本に来た途端に、「なんか、場違いなこと言った、私？」みたいな感じにならなきゃいけない、あの行動チェンジがね。最近、もうやめましたけども、五十過ぎて(笑)。

変人ステイブ・ジョブズ

野谷 ヤマザキさんが描いたステイブ・ジョブズも典型的な

変人ですね。

ヤマザキ はい、『ステイブ・ジョブズ』は実在した人物であり、しかもつい最近までいたので、想像力で全部描いてしまえばいいというものではなかったという意味で大変だったんです。ジョブズファンがたくさんいるから重箱の隅をすぐつかれますから。ジョブズこそ、本当に皆さんに知ってもらいたい人物ですが、実は私、ジョブズのコミカライズですね、原作が『ステイブ・ジョブズ』という、ウォルター・アイザックソンが書いて、ベストセラーになった本ですけど、その漫画ヴァージョンを描いてくれて依頼が来たとき、一回断ったんですよ。そのとき実はシカゴにいて、私が住んでいたダウンタウンのすぐそばにアップル・ストアがあつて、うちの子どもがそこで私のあげた小遣いをすべて吸われてくるんです。もう本当に腹立たしくて、本当にこのジョブズのビジネススタイルというのが気に入らなくて、嫌いだったので、一年ちょっと保留にしていたんですけど、あるときうちの子どもに、「先入観で決めるのは間違っている。ママは知らないだろうけど、ステイブ・ジョブズの本はちゃんと読んだほうがいいよ」と言われて、初めてしっかり読んで、あ、この人のことは描けるなと思ったんです。描けるなと思ったのは、やっぱりステイブ・ジョブズが周りととらわれない、独自の道の歩み方をまったく怖がらずにできた人であり、何よりすごいのは、孤独に対する免疫力が相当ついている。実際仲間外れもされています。それどころか、自分がつくった会社から追い出されたりしています。なのに、あの人は、泣いたり、苦しんだりしながらも、起き上がり小法師みたいに戻ってきて、毅然と前に進んでいくんですよ。ちゃんと向き合うところがすごいなと思うんです。そして、ちゃんとそれを自分の血となり、肉となり、エネルギーに変えて、そ

してどんな周りの人が否定するものを通していく。

野谷 ヤマザキさんの漫画も彼の怪物的なところをうまく描いていますね。

ヤマザキ 例えば、最初のアップル・コンピュータができました。あそこにはもう一人ステイブ・ウォズニアックという人物がいて、二人でつくったものですから、ジョブズのほうはマーケティングに回って、ウォズニアックのほうはものすごい機械オタクですから、マニアックなコンピュータをつくりたい。USBポートをいっぱい付けたがるわけです。でもそれをジョブズは「ダサイ、おまえ。いくらマニア受けするって言うたって、そんなダサイもの誰も買わないだろう、コンピュータをもっと一般に浸透させるためにはスタイリッシュにしていかなきゃいけない」と言う。そして、彼はアップル・コンピュータをどんどんスタイリッシュに変えていく。同じアップル・コンピュータの中でも、機種によって互換性がないとあり得ないじゃないですか。それで腹を立てた人たちもいると思います。「これ、また別を買わなきゃいけないの」というあの商売ストラテジーが憎たらしくて、だけでもつい買っちゃう。不便であることをあたりまえに慣れさせていく。今だって、iPhoneをみんな使っているけど、今ジョブズが死んじゃったんで、文句言える人がいないから、どんどん自由になってきているけど。たぶんね、あれだけ不便なのに、こんなに使いこなせて、こんなに需要があるものっていうのはそんなないんじゃないかと思えます。逆にマイクロソフトのほうは、もっともっと便利で使いやすいものを追求していくわけですよ。

野谷 漫画の中でビル・ゲイツはあんまり魅力的じゃないですね。

ヤマザキ あれはやっぱ、私の個人的意見が入っています。

ビル・ゲイツはビル・ゲイツで、ああいうかたちもありなんだけど、やっぱセンスが足りないんですよ。ジョブズは何よりも、自分が本当に欲しいもの、まず絶対に自分が欲しいものから入るんです。どうやったら売れるのか、どうやったらお金に換えられるのか、ということよりも、おれが欲しいものをまず作る。それはダサかったら嫌だと。ステイブ・ジョブズは音楽がすごく好きですね。ポプ・ディランが大好きで、昔リールテープでしか音楽が聴けないときは、山のようなテープを持ち歩いていて、あっちこちでそれを聞かなきゃいけない。不便だったあれが今iTunesとか、Podに変化しているわけですね。CDだって面倒くさいじゃないですか、昔、ポータブルCDで聴けるときはすごいと思っただけど、ちょっと飛び跳ねたりすると音が飛びますからね。まだウォークマンのほうが良かったな。それでもまだ駄目だ、ということによって、iPodに変化させていく。ジョブズには、素晴らしいものを生み出せる人は、科学的な脳と芸術的な脳の間になきゃいけないという思想があるわけですよ。それは、なんにでも応用できます。どんなことをしていても、どんな学術研究者であっても、やっぱ科学だけのことを、科学だけしかやらないと、それまでんですよ。でも、そこにちょっとでも、別な要素が入ってくると、そこに使わなきゃいけないエネルギーは、また負荷として大きくなりますし、悩みも大きくなるけども、その分だけ出てくるものは面白くなる。

野谷 彼は東洋思想にはまったり、菜食主義者だったりで、そういう意味では、もっと穏やかになっていても良さそうなんだけど、最後まで激しかったでしょう。死ぬまで、死ぬと思っていなかったみたいところありますよね。

ヤマザキ 「おれは菜食主義で絶対治ると思ってた」と言っ

ていますから。皆さん癌になったら病院に行ったほうがいいですよ。ステイブ・ジョブズさんは野菜で治そうと思つて失敗しました。あとになって「失敗した」と自分でも言っています（笑）。でもあれは、やっぱりちようど一九七〇年代初頭のヒッピーで、あの世代というのは、東洋思想がすごく幅をきかせていて、みんな禅とかやったんですよ、ジョブズなんてインドまで行って、頭をツルツパゲにして帰ってきて、出家することまで考えていましたからね。そんな人があんな大ビジネスマンになつていくんだから、面白いなと思うけども。あと日本の伝統的文化ですよ、ミニマリズムの。ああいったものに対しての敬意がなかったら、アップルの製品は生まれていなかったと思いますし、やっぱりいろんな経験をしてきたことが、最終的にそこに結実していく。

野谷 そうですね、だからある意味で短い一生なんですけど濃密で、その中に様々な文化が入っていますよね。

ヤマザキ 僕の専門はこれだからって閉ざさなさいです。関係ないですよ、専門なんて。何してたつていいんですよ。例えば、文学やつたつて、科学的なことに興味持つたつていいと思います。そうやつて転換していく人いっぱいいるじゃないですか？

野谷 だから新しいものに気がつくんでしよう。発見というのは常にありますね、パッとひらめいたり。それを伝統芸みたいにしちゃうと、なかなか出てこない。

ヤマザキ これ日本人にすぐ特徴的なことだつて、外国の人に言われたんだけど、日本人つてすぐ役をつくりたがる。自分は例えば課長なんだつていうことにまとめることで安心する。でもそれがいい状態というのは、やっぱり砂上の楼閣で、足の踏み場がない、根無し草になつてしまう。でもそれこそ、それ

だからこそ得られるものがあるのに、それを避ける。

野谷 場をつくるのは結局、定住型ということでしょうか。生活スタイルが定住型。だから、発想までが定住型になつてしまふのかな。

ヤマザキ そうですね、この間ギリシャで学生さんと、人間は定住型にしたことによつて、知性が衰えるようになったという話をしていて、定住型にすることによつて、安心感を得る、その利便性を、無駄なエネルギーを浪費せずに得られるようなかたちにしていった、それによつて人間の脳は退化したつていう言い方をしていましたね。やっぱり狩猟型だったときは、あらゆる知恵を使つて、地球のあらゆる事象というものにと向き合つて、この動物はこういう動きをするなつていうことを常に考えていなきゃいけない。でも、農耕つていうのは、自分が決めたテリトリーの中で、羊とかを飼つていけば自然に増えていくし。それを自分で食べるか、売るかすれば生きていけるといふ。

古代ローマと現代

野谷 だから、『プリニウス』なんか読むと、やっぱりハッと思いますよね。世界つてこれだけいろんな面白いものがたくさんあつたんだつて。図書館に行つてプリニウスの『博物誌』を見ただけです。もう最初から最後まで読み切れないから、部分的につまみ食いですけど、すごいものですね。

ヤマザキ プリニウスの書いた本は、全部読まなくていいんですよ。あれは、抜粋してたまに思い立ったときに、引つ張つて読めば。

野谷 そういうものだろうと思ひました。

ヤマザキ そのプリニウス先生ね、『博物誌』の中で無茶苦茶なことを書いています。地震の理由は、地面の下に風が閉じ込められていて、出られなくなつて揺れている。それで、地震が起きる(笑)。何か地面から来ているものなんだなつていうのは、分かるのは分かりますけどね。あと、海ウサギというのがいて。海に住んでいるウサギなんです。それは、ちよつとでも触れただけで毒氣にあたつて死ぬと言うんですよ。だけでも、なぜか処女の人にはそれが起きないつて書いてあるんですよ。このおじさん何考えているのかしらと(笑)。

野谷 ちゃんと漫画にしてくれていますね。

ヤマザキ 言ってみれば南方熊楠ですよ、南方熊楠の古代版と言つてもいいかもしれない。彼は、ありとあらゆることを全部書き留めておいたんです。でもラテン文学としてはまったく最低の文学です。どうしてかという文章力がないからです。しかも人に書かせているので、自分の文章じゃないんです。しかも受け売りで、もともとギリシヤの偉い人が調べてきたことを、まるで自分が見てきたことみたいに書いています。三人称だったのが、いきなり一人称になったりします。あることないこと書く中で、やつぱり彼は当時のローマというの、まだ宗教に拘束されていないので、コロシラムとか行つて、人の殺し合いとかがあつても、別におかしいことじゃないんですよ。人の殺し合いつていうのは、動物が殺し合うみたいに当たり前のもので、それを面白いと思う人がいても、別にモラル的に問題があるわけでもない。

野谷 最近翻訳した『ドン・キホーテ』にもそういうところがあります。暴力のコンセプトが、今とは違っている。

ヤマザキ でもそんな中で、プリニウスはどうもおかしいぞと思つてはいるわけです。そういうやつぱり、原始的な倫理観とい

うのはこういうふうには発生するんだなつていうのも、プリニウスの本を読んでいると、なんとなく伝わってくる。あと動物、小さいものに対するリスペクトがものすごく強いです。漢方薬で現代我々が使っているようなものがありますよね。それが『博物誌』の中に出ています。例えば咳を治める漢方薬にセナガタンポポというのがあるんですけど、それは当時から用いられていたと書かれています。あとキャベツが胃腸にいいかというの語られていて、当時の古代ローマ人にとっては、キャベツというのはなくてはならない植物だったんです。他にはタツノオトシゴでハゲが治るつて書いてありました(笑)。漫画の中で出していますけど、ついにあの人は試さないで終わっちゃうんです。やけどには馬の糞をなすりつければ治るとか、いろんなことが書いてあります。今キャベジンつてあるでしょう、キャベジンがキャベツからきているんですよ？ あれ、古代ローマ人も飲めますよ、キャベジン、飲み過ぎの人に(笑)。二千年前というところも皆さん昔のことと思いがちだけでも、全然時空を超えて今も昔も変わりがありません。

野谷 それはやつぱり、マリさんがイタリアにいたことによつて、古代と現代がつながっている、その両方が見えるつていうことがあるんじゃないですか？

ヤマザキ そうですね。全体的に私たちが生きている時代、そして知つていること、地球上で起きたこと、全部ひっくるめて考えていくという意味では、イタリアというのは、あらゆる時代のものが層になつてあるので、考えないわけにいかないんです。だって、古代のそれこそローマ人たちが来る前の、エトルリア時代の遺跡があつて、それを今度ローマ人が踏襲し、そこにはギリシヤ人たちが渡つてきた遺跡があつて、中世にはビザンチンやノルマンが入つてきて、アラビヤ人も入つてきてとい

うのが全部ミルフィューユになっている。あそこにおいて、そういう歴史と向き合わないで生きていくのって無理です。それはイタリアと限らず、スペインだってそうでしょうし、ポルトガルだってそうでしょうし。

シリアと『テルマエ・ロマエ』

ヤマザキ そんな中で、私が『テルマエ・ロマエ』を描く一番大きなきっかけになったのはシリアですね。シリアにしばらく暮らしていたときに、当時はまだ紛争なんか起きていないですから、二〇〇〇年の初頭ぐらいですけど、シリアのダマスカスにいたんですけど、そのときシリアの国内の遺跡巡りを三回ぐらいしたんです。すると、シリアの遺跡は、ちゃんと世界遺産登録をするエネルギーも気力もないので、すごいものが放ったらかしで砂漠の中にあるんですよ。『ロンリープラネット』とかを見ているとすごい遺跡があるって書いてあるから、砂漠の中の道を延々と車を運転していくと、確かにあるんですよ、古代の神殿の跡が。でもよく見たら神殿の柱と柱の間にヒラヒラと色とりどりのものがぶら下がっているんですよ。「あれ、何？」って言って、近寄ってみたら、洗濯物なんです。ブラジャーとかパンツが干してあるんですよ。「え？」と言ったら、中からターバンを巻いたおじさんが出てきて、「なんかうちに用かね？」と言うから、「え、だってこれ遺跡」と思うじゃないですか、遺跡っていう概念がないんですよ、みんな。「だって住めるからいいだろう、ここ住んでいるんだよ」って言って、神殿の中に羊をいっぱい貯めていて、「ここ羊たちが、すごい気に入っているんだ」と言うから、「良かったですね」と言って帰ってきて

ましたけど（笑）。あのとき、遺跡から普通におじさんが出てきたのを見て、時空がゆがんだんですよ、あの瞬間。この自分たちと同じ時空で生きていない。今私二千年前に来たなと思っても、まったくおかしくないなど。そんなことが繰り返されるものだから、ああいう漫画の発想につながっていったんじゃないかと思います。

野谷 なるほど、お風呂の前にまず歪んだ時空があったわけですね。

ヤマザキ 古代のローマの遺跡といえば、有名なのがコロシムですよ。イタリアに行かれた方はご覧になったと思いますけど。あとパンテオン、これ私の大好きなハドリアヌス帝がつくった建造物で一度も倒れていません。二千年間造られたときのままのたがずまいを残しています。それはどうしてかという、古代ローマ時代というのは、我々のインフラ技術より進んだ技術を持っていたからなんです。古代ローマという、古代と付いているだけで、みんな馬鹿にするじゃないですか。ところが古代人のほうが進んでいるんですよ。当時、ローマ・コンクリートというのがあって、そのコンクリートを何で作っていたかという、ナポリのそばにプテオリという海岸があって、そこで採れる石灰岩の土でしかできない。しかも海の中から採ってくることにより、アルカリ性の成分が入っていて、ものすごい凝固剤になるわけです。今、作られているコンクリートは耐久年数五十年と言われていますけど、古代ローマ時代のコンクリートは、二千年たっても崩壊していないんです。それで今、改めて耐久、耐震構造の素材として、ローマン・コンクリートをまた用いようという動きが出てきているとイタリアで言っていましたけど、ちよつと信じられないですね。

野谷 日本にも輸入できないかな。でも、二千年も持たせたい

建造物があるだろうか。

ヤマザキ あと耐震っていう意味では、イタリアも火山国ですから、『プリニウス』という漫画は、まさにそれを比較している漫画なんですけど、すでにレンガの組み合わせによって、どういう組み合わせ方にしたら、耐震になるかということも当時すでに分かっています。それはポンペイの遺跡を見ると、火山噴火だけではなくて、実はあそこは大地震にも見舞われていて、一時期大崩壊しています。その後復興をした町をつくらうとしているところで火山が噴火しちゃったので、そのまま埋もれているんですけど、その復興途中の町の様子を見ると、どうやって人々がこの地面の揺れに対抗しようとしたかという軌跡が全部出ているんです。あれはやっぱり、我々日本人と共通するものというか、放っておけないなと思いました。お風呂という面も放っておけなかったですけど、おなじ火山国、そして地震国に暮らしているメンタリテイも共通する部分があるんじゃないかなと思っただけです。それが『プリニウス』を書いたきっかけでした。

野谷 ゼネコンに任せていてはダメですね。ところで、『プリニウス』の第一巻の最初に地球を俯瞰してしまうみたいな絵を描いています。ヤマザキさんは、やっぱりその俯瞰ということをすごく大事にしていますね。

ヤマザキ 俯瞰で見ている理由は、私がアイデンティティがないからでしょうね。何人だかよく分からないし、カトリックの家に育って、修道士に預けられているけど、イタリアみたいな国に行くと、社会主義的な思想を持つちゃったりとか、ひとつの何かに入らない生き方をしてきたことによって、やっぱり地球をすごく離れたところから全体的に見たいという気持ちがあります。たまたま私が行ったときのイタリアも、キリスト教民

主党と共産党が第一党だったんですよ。それ自体が魅力的じゃないですか、その二つの対立すべきものが共生し合っていて、あり得ることとして、根付けられていた世界ってほかにどこがあるかなと思うんですよ。そういう意味ではイタリアはすごく成熟していると思います。トランプ大統領が勝ったときも誰も何も言わない。しょうがないでしょう、こんな、人間なんていうものは。うちにはベルルスコーニがいたんだよっていう話になりますから（笑）。そう言われると諦観して見るようになります。

映画の『ゼロ・グラビティ』の最後で、女宇宙飛行士が地球のどこか分からないけど、着陸するじゃないですか。あれどこかなんてどうでもいいじゃないですか、どの時代のどこかなんて。あの感覚が常にあってほしいと思うんですよ。あの人はとにかく、地球に生きている、地球人だっていう意識しかないでしょう。私も同じ感覚なんです。

野谷 国境や領土などというものが小さく感じられる宇宙的な話が出たところで、時間が来てしまいました。ヤマザキさん、ありがとうございました。（会場拍手）ではここでフロアからの質問に移りたいと思います。

質疑応答

質問者 質問が二つあります。『プリニウス』の中で、噴火しているのに、プリニウスはお風呂に入っていて、お付きの人が、「なんでこんなときに入るんだろう?」と言っているんですけど、あれはどういう意図で風呂に入れたんでしょうか?

ヤマザキ あれはプリニウスという人が、火山が噴火して、自分がそれで死ぬことになっても、それは地球の事情であり、それには逆らえないという姿勢を見せているんです。人間だけ特別な生きものなんだから、生き残らなきゃという意識はあの人にはまったくありません。自分も自然の一部だということ象徴したくて描いたシーンですね。

質問者 あともう一つ、さつきルネサンス時代の絵画と、今の日本の漫画がほとんど同じって言うていたと思うんですけど、分かりやすく楽しいところが多いということですか?
ヤマザキ 一番分かりやすい例で言うと、一三〇〇年ぐらいまでのマリア様って全然可愛くないんですよ。アイコン画と違って、顔が固まっていて、子供もまったく可愛くないんですよ。でも、それに反抗心を得た、とある坊さんがいましたね。その坊さんは坊さんでありながら、女の人と駆け落ちをしたという、フィリップ・リッピという名前で、ものすごく美しい、今でいうアイドル顔のマリア様を描くことではもう、業界きつてのナンバーワンだったんです。モデルは自分の妻なんですよ、その駆け落ちした、しかも尼さんですよ。その顔を描いたら人気が出たんです。みんなやっぱり、毎日拝むなら、可愛いほうがいいだろうという思いがあったんです。そういう意味では人

間の精神というのは、どこかで美しいものを見て癒されたいとか、元気を出したいという気持ちがあるわけですよ。

質問者 自分たちの中で宗教が根付いていて、それで初めて可愛くなったということなんですか。

ヤマザキ 可愛くなつたというよりも、宗教を俯瞰で見ることができた人です。はまりきっていたらそんなことできないです。神様、神様と思っている人は、そのタガを外そうとか、今まで固定されていたかたちを崩そうなんて思わないですよ。そこを、ルネサンスというのは、ギリシャ・ローマ的思想というのが、新しくまた復興している時代のことをいうので、というのは新しく生まれ変わるという意味ですけど、宗教のあり方を疑問視したり、俯瞰で見えるようになってきた時代でもある。じゃなかったら、そういう改革はできないんです。一回外から見ても、再評価している。なんかおかしくないか、という人がちゃんと声をあげられた時代だったんですよ。

質問者 日本は海外に比べて芸術の価値というか、認識が低いと思うんです。それはどうしてだと思いますか?

ヤマザキ 日本における芸術の価値観が低いのはどうしてかという、美術館に行くじゃないですか、大概目玉の絵が来ます



よね。例えばレオナルド・ダ・ヴィンチが来ます。その絵をみんないと思わなきゃいけないと思ってるんですよ。メデアがあまりに、「すごい絵が来る」って言うから、すごいと思うところで、もう自由は拘束されています。例えば、私、最初ルーヴル美術館に行ったとき、実はモナリザはたいして見ませんでした。ほかのものがすごすぎて。だから自由に自分がいいと思うものに出会って、評価できればいいと思うんです。それを「ほかの人がいいと思うから、いいと思わなきゃいけない」という、まずそのタガを外さなきゃいけない。あと「ああ、宗教だ、もう駄目だ」とか、「ああ、もう異文化だ、もう駄目だ」、「古代ローマ二千年前、全然私と違う、接点もない」と思う時点でブロックするじゃないですか。それを全部一旦外してみる。その他大勢のどうでもいいような絵のことが気に入ったりするんだったら、それでもいいし。よく日本の美術展は、目玉になる絵画、三点ぐらい持ってきて、あと、全然知らないの来るじゃないですか。結構それに文句言うじゃないですか。いいじゃないですか、そういうことがあるから、そういうのに接することができるわけじゃないですか。はるばるそういうチャンネルをもらってきた絵なんだからと、私は逆に思うわけですよ。質問者 日本では、あいさつに、「おはようございます」と「おはよう」とありますけど、イタリアでも、そういう丁寧なあいさつはどういう言葉になるんですか。

ヤマザキ イタリアの丁寧な言葉、一応敬語の扱いはありますけど、そういう問題じゃないですね。リスベクトがあるかどうかというのは、言葉に依存していません。全体的にその人の目であり、視線であり、たまたまいであり、態度ですね。それでは表せません。あなたに私はいく敬意を持ってますよというところは、言葉だけでは表せないってみんな思っ

ます。なので、言葉に依存する度合いというのすごく低いですよ。あとは、仕事であり、表情であり、そのあとでどんな言葉で言うかですね。前に私海外で日本人に外国語を教えているポルトガル語の先生と話をしていて、「日本人にポルトガル語を教えるの本当難しい」と、言われたんですが、それはポルトガル語に限らず、日本人にとって、なんで、外国語習得が難しいかという話になったときに、言葉に対して、きちんと構成して言わなきゃとか、言葉の構成や文法に対しての、「間違っただけを言わないようにしなきゃ」っていうところが強くて、そこで詰まっちゃうらしいんですよ。「ハッターでもいいから、動詞の活用なんかできていないから、原型でいいから、どんどんつなげて、言っちゃおう」みたいなことができない。だから、教えるのが難しい。でも、海外に行くとき、平気で、「俺、十カ国できるよ」とか言う人いますからね。日本語できますと言っても、「コンニチハ」それだけです。だけど、それは自分の中でできる言語の一つなんです。日本の人は絶対に言えないじゃないですか、「ここで下手にイタリア語できますなんて言っちゃって、いっぱい話しかけられたらどうしよう」とか思うじゃないですか。そういうのはないんですね。言葉の向こう側で、何を言い表そうとしているのが大事であって、言葉がうまくできるかどうかは、はっきりいって外国の人はどうでもいいと思います。本当に何かを伝えたい人はね。

日本人は、本当は出来るのに、出来ないって言っちゃうじゃないですか。出来なくて自分のせいにされたら困るから。むしろ、せいにされてください。「おまえ出来るって言って出来なかったな」って言われてみたら、それはそれで結構受け入れますから、そういうことを。今度頑張ろうという気持ちにもなるし。ラテンの人はそういう人は多いですよ。ハッターだ



だけでは、ハッキリで成り立っていると、こっちもだんだん信用しないエネルギーも出てくるし。信用しないエネルギーが強いからこそ、人と結び付いたときの結束感は強いんですね。それがちょっと日本には足りない部分かなと思います。

野谷 そういう気はしますね。要するにいい意味での奇人変人が日本には足りない。日本にも和して同ぜずという精神があるんですね。ヤマザキさん、今日は長い間どうもありがとうございました。ありがとうございました。

ヤマザキ こちらこそ、野谷先生にも拍手を、とても楽しかったです、皆さんどうもありがとうございました。(会場拍手)

(二〇一八年五月二十九日、於名古屋外国語大学七〇一教室、

編集・伊藤達也)